

# 「博多祇園山笠」における男衆と女衆の認知構造の違いに関する研究

森永 智年<sup>\*1</sup>・土井 眞理子<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>九州女子大学家政学部人間生活学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

<sup>\*2</sup>北九州市八幡西区折尾3丁目8-24-406 (〒807-0825)

(2016年6月2日受付、2016年7月28日受理)

## 要 旨

日本三大祭の一つに「博多祇園山笠」がある。山笠を支えているのは地元住民「博多部」の男衆であるが、その男衆を裏方で支えている女衆の役割があつてこそ山笠がその地域で受継がれてきたものと考えられる。しかし、これまでの研究では、この昇き山を担う男衆やそれを支える家族の「博多祇園山笠」の祭りへの思いについて行ったものはない。

本研究では「博多祇園山笠」の祭りについて、それに関わる男衆と女衆の祭りに対する思いの違いを、山笠を執り行っている男衆と、その男衆を支えている女衆の認知構造の違いを、実験的手法を用いた認知心理学的アプローチによって解明することを試みた。その結果、男衆の意識が祭りそのものにあるのに対して、女衆の意識はそれを支え見守るところにあることがわかった。

## 1. はじめに

### 1.1 背景と目的

日本三大祇園祭の一つである博多祇園山笠（以下山笠と略す）は、750年余りの伝統を誇る櫛田神社の奉納神事として執り行われる（宇野ら2007）。山笠は博多の商人を中心とし、7つの流<sup>ながれ</sup><sup>注1)</sup>と呼ばれる町の集合体に分かれて自主運営されている。それぞれの流で昇き山と呼ばれる約1トンもの山車を、水法被<sup>みずはっぴ</sup><sup>注2)</sup>に締め込み姿の屈強な男衆が担ぎ上げ、博多の町を突っ走るさまは勇壮そのものである。また、祭りのクライマックスである「櫛田入り」では、櫛田神社前の山止め<sup>やまど</sup>から清道<sup>せいどう</sup><sup>注3)</sup>を廻って、境内を出るまでの112mを昇き山と走る飾り山笠で7つの流が駆け抜けるタイムを競い合う。山笠は地元の男衆住民が担っているところが大きい、その男衆を裏で支えている女衆（ごりょんさん）の務めがあつて成り立っている。女衆の夫や息子達が山笠の仕事に関わっている間、商売は勿論、家族を守っているのは女衆である。祭りの期間中は毎日締め込みや水法被長法被<sup>ながはっぴ</sup><sup>注4)</sup>、手拭の洗濯や締め込みの手伝いも女衆の仕事である。また、直会<sup>なおらい</sup><sup>注5)</sup>の炊き出しの準備も女衆の仕事である。

山笠に関する先行研究については、山笠の組織運営（日比野ら2011）や直会の場と役割からの視点もの（田村ら2004,楠本ら2009）があるが、昇き山を担う男衆やそれを支える

家族の山笠の祭りへの思いに関するものはない。本研究では山笠の祭りについて、それ関わる男衆と女衆の祭りに対する思いの違いを認知構造図の違いとして可視化することで明らかにするのが目的であり、祭りの継承と変容に資するものと考えられる。また、この研究では「東流」<sup>注7)</sup>の重要な役割を担う男衆、および男衆を裏方として支える女衆に直接取材を行い、山笠に携わる男性と女性では山笠に対する意識がどのように違うかインタビューによるイメージコラージュ技法を用いて明らかにした。

## 1.2 研究の方法

認知心理学では、人間をひとつの情報処理システムとみなす考え方がある。この考え方では、環境が与える刺激は情報とされ、行動は人間の情報処理の結果として捉えられている。この人間モデルを「認知心理学的人間モデル」と呼ぶ。この人間モデルはKellyがパーソナル・コンストラクト理論で設定したもので「人間は経験を通じて構築されたコンストラクト・システムと呼ばれる各人に固有の認知構造を持ち、その認知構造によって環境およびそこでのさまざまなできごとを理解し、またその結果を予測しようと努めている」としている。コンストラクトとは、感覚器官をとおして伝えられた環境や出来事の情報を理解する際の認知の単位のことをいう。他とのコンストラクト間には因果関係が存在しており、これらの因果関係が構成するものを認知構造と呼んでいる。それは、図1に示すように感覚器をとおして知覚された情報は、固有の認知構造で解釈され状況を理解する。そして、結果を予測し、最善の結果を生むと判断した行動を行う。その行動の結果が予測した結果と異なった場合、その解釈する部分を修正する。認知構造とは情報を解釈し理解する全体システムをいい、評価構造はその評価に関する部分のシステムのことをいう（讃井2000）。

本研究では、パーソナル・コンストラクト理論を基に、イメージコラージュ法を使用して、山笠に携わる博多部の男衆とそれを支える女衆の祭りに対する意識構造の違いを認知構造として図式化する形で可視化を行った。なお、本論で述べる意識構造とは、構造化された意識表象として、認知構造内で意識として体制化されたものと定義する。

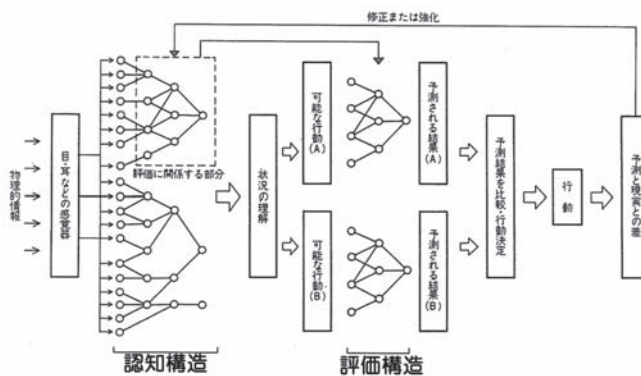


図1 認知構造と評価構造<sup>注8)</sup>

### 1.3 イメージコラージュ法

イメージコラージュ技法は臨床心理学分野で芸術療法として用いられる。また、ユング派により開発された箱庭療法の携帯版として活用されているが、一般には理論的背景を持たない経験的心理療法と位置づけられている。

しかし、筆者らはイメージコラージュ技法を環境評価に活用できる方法を検討した結果、認知モデルにPavioの二重符号化理論を用いることで、環境評価ツールとしてその認知構造を明らかにすることを可能にすることができた（森永ら2011）。

イメージコラージュは、イメージをメタファーとして表現することである。メタファーとは「喩え」「言い換え」であり、特定の事象に解釈がなされた比喩表現である。例えば、デザインプロセスで使用されるイメージコラージュは表現しようとするデザインイメージを表現する「喩え」である。あるテーマによって構成されるイメージコラージュでは、心的イメージがテーマに沿って、高次に構造化され意味を付加されたものであり、その創り出されたデザインイメージをイメージコラージュによりメタファーとして表現されたものと解釈することができる。このことは、Paivioの二重符号化理論によって説明することが可能である。

図2に示す二重符号化理論のモデルでは、言語的刺激と非言語的刺激とが異なった形で、異なったシステムで記憶されるとしている。言語的システムでは言語的刺激は言語的表象として、連想的関係のネットワーク構造を形成している。一方、非言語的刺激はイメージ的表象として連想的関係によって包含関係が決まる集合構造を形成している。そして、対応する言語表象とイメージ的表象の間には、関連結合があると考えられている（Paivio1990）。

従って、イメージコラージュは、例えば言語によるテーマ（言語的刺激）が与えられると、そのテーマに近い言語的表象で構成された認知構造が言語的システム内で再構成され、関連結合を通して非言語的システム内でそれに似合うイメージ的表象が構造化され、意味をなす形で非言語的反応として出力される。そして、視覚的な短期記憶装置内で再構成化されることでイメージ化される。その心的イメージを、イメージコラージュを用いて視覚的に認識できる形に置き換える作業であると説明できる。また、イメージコラージュの作成過程で生じた新たな非言語的刺激は、感覚システムを通り、新たな解釈が組み込まれた表象（表象的結合）として記憶されることができると考えることができる。

本研究では、非言語的刺激として画像を提示することで、そのイメージを喩える画像の組み合わせを非言語的反応のイメージコラージュとして出力する。喩えに使用された画像を手掛かりに、その画像と関連結合にある言語を抽出しようとするものである。

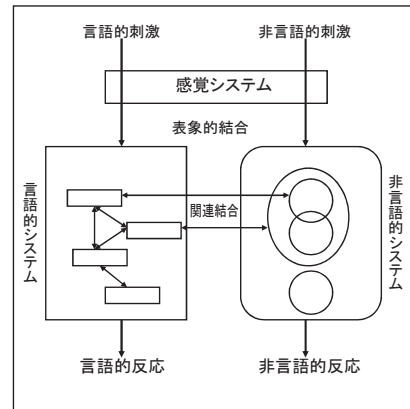


図2 二重符号化論の主な構成要素<sup>注9)</sup>

## 2. イメージコラージュ法を用いた山笠に対する認知に関する調査

### 2.1 調査方法

調査では、言語的刺激として「博多山笠」を提示し、それをイメージコラージュで表現してもらった。次にコラージュするものとして写真を130枚<sup>注10)</sup>提示し、被験者を選んでもらった。その写真をきっかけに、その写真を選ぶことになった博多山笠からの印象をオリジナル認知項目として抽出した。そして、そのオリジナル項目からラダーリングによるインタビューを行い、それをもとにそれぞれの認知構造図を作成した。

### 2.2 被験者

被験者とその属性は、東流の男衆10名とその妻を含む女衆10名である。年代は20代から60代で合計20名を対象とした。その属性を表1に示す。

表1 被験者属性

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
男	1名	2名	4名	1名	2名	10名
女	0名	2名	6名	1名	1名	10名

### 2.3 イメージコラージュ法の調査手順

- (1) あらかじめ用意した130枚写真を提示し、教示として「あなたが思う「博多山笠」をこの写真を使ってイメージコラージュで表現して下さい。」と述べた後に、イメージコラージュに必要な写真を選択してもらう。
- (2) 選んだ写真を使用してイメージコラージュを作成してもらう。
- (3) イメージコラージュした写真の一つをもとにインタビューを行う。
  - ① 選んだコラージュした写真から連想する博多山笠の印象について、聴き取る。  
その印象をオリジナル項目として調査票に記録する。
  - ② その写真を選んだ具体的な理由を聴き出し（ラダーダウン）、オリジナル項目の右側に具体的な項目として記録する。
  - ③ その写真を眺めるとどのような気持ちになるのか聴き出し（ラダーアップ）、オリジナル項目の左側に心情的な項目として記録する。
  - ④ オリジナル項目と因果関係にある具体的項目、心情的項目をラインで結ぶ。
- (4) ①②③の順にイメージコラージュにある全ての写真について、丁寧に聴き取りながら調査票に記録する作業を繰り返し、できる限り多くの情報を抽出する。
- (5) インタビュー終了後に、調査票を確認し、疑問な点があれば被験者に確認する。特に表現が異なるが同じ意味の場合や逆に表現が同じで意味が異なる場合には確認をする。

### 3. 調査結果

インタビューの調査票をもとに個人別の認知項目のネットワークを整理した認知構造図を作成し、個人別の認知構造図を重ね合わせて頻出2以上で共通する認知項目を抽出し、その項目間の因果関係を示すラインも併せて累計することで、男衆と女衆の認知構造図を作成した。

#### 3.1 認知構造図と考察

イメージコラージュで抽出した男衆の認知構造図を図3、女衆の認知構造図を図4に示す。

##### 3.1.1 男衆の認知構造

###### (1) 山笠に対する「楽しい」という思い

上位概念項目である山笠への気持ちで、同様な意味で使用されている「嬉しい」(7名)、「楽しい」(5名)、「ワクワクする」(5名)は「楽しい」(17名)という項目として集約した。

男衆の「楽しい」という思いは、下位概念項目で示される「山笠の正装」「山笠の格好」の祭りの衣装、「直会での料理」の直会関連、「山笠を受け継いでいく子どもたち」の祭りの継承、「皆で一体となって頑張る山笠」の仲間との団結、「どんたくの次は山笠」の祭りへの期待、「博多の名物」「山笠が走る町並み」の祭りの風景から成り立っている。

###### (2) 山笠に対する「緊張感」について

上位概念項目である山笠への気持ちで、同様な意味で使用されている「緊張感」(2名)、「引き締まる」(4名)、「シャキッとする」(2名)は「緊張感」(9名)という項目として集約した。

男衆の「緊張感」は、下位概念項目で示される「山笠の格好」「山笠の正装」の祭りの衣装、「博多駅も山笠も九州の代表的なもの」「山笠の象徴」の祭りへの誇り、「先輩から受け継いだことを次へ繋ぐ」「町での自分の役割をしっかりと果たす」の祭りへ責任感から成り立っている。

特に、この「緊張感」の上位概念のグループにのみ出現する特徴的下位項目は責任感である。

###### (3) 山笠を通しての達成感

男衆の「達成感」は、下位概念項目で示される「皆で一体感となって頑張る山笠」の仲間との団結と「直会や反省会での料理と酒」の直会関連で構成されている。

###### (4) 山笠と祭り風景への思い

男衆の「落ち着く」住まいのなかの山笠は、「山笠が走る古い町並み」の祭り風景、「神事が静かに行われる」の櫛田神社への思いから構成されている。

###### (5) 山笠と古い町並み

男衆が「懐かしい」と感じる町並みは、「山笠の走る古い町並み」「山笠を感じる商店街」であり、「懐かしさ」が古い町並みと山笠の組合せで構成された心象的祭り風景から生じている。

(6) 山笠を支えてくれる人々への感謝の思い

男衆が「感謝」の思いを感じるのは、「山笠は協力者があってこそ続けられる」の祭りの継承、「感謝しながら頂く酒と肴」の直会関連により構成されている。

(7) 山笠の伝承への責任感

男衆が「祈る」気持ちを感じるのは、「みなで山笠をバトンタッチしていく」の祭りの伝承への責任感で構成されている。

### 3.1.2 女衆の認知構造

(1) 櫛田神社への畏敬の念

女衆が「厳か」な気持ちは、「山笠の神事が行われる場所」「常に身近にある神社」に示されるように櫛田神社への思いと山笠との関係により構成されている。

(2) 男衆の晴れ姿への思い

上位概念項目である晴れ姿への気持ちで、同様な意味で使用されている「かっこいい」(6名)、「勇ましい」(2名)は「かっこいい」(8名)という項目として集約した。

女衆が「かっこいい」と思う気持ちは、「山笠の晴れ舞台」の祭りへの誇り、「山笠の正装」「山笠の格好」「締め込みは妻の手伝う仕事」の祭りの衣装、「飾り山は山笠そのもの」の祭りの風景により構成されている。

(3) 山笠を受け継ぐ子どもへの思い

女衆が「可愛い」と思う気持ちは、「山笠を受け継いでいく子どもたち」「山笠の格好をした赤ちゃんは可愛い」の子供への思いで構成されている。

(4) 山笠を支える女の思い

女衆が「願い祈る」気持ちは、「無事に山笠ができるようにと祈りながら作る」の直会での役割、「夫の夢であり目標である手拭」「夫の夢であり目標である台上がり」「山笠の安全祈願をする」の夫への思いにより構成されている。

(5) 山笠に対する「楽しい」という思い

上位概念項目である山笠への気持ちで、同様な意味で使用されている「ワクワクする」(6名)、「楽しい」(4名)は「楽しい」(10名)という項目として集約した。女衆の「楽しい」という思いは、下位概念項目で示される「山笠の正装・礼装」の祭りの衣装、「雪駄の音に山笠を感じる」「太鼓の音に山笠を感じる」の祭りへの期待、「山笠を感じられる場所」「飾り山は山笠そのもの」の祭りの風景により構成されている。

(6) 山笠に対する「緊張感」について

女衆の「緊張感」は、下位概念項目で示される「山笠の正装、礼装」「締め込みの手伝いと洗濯や管理は妻の仕事」の祭りの衣装により構成されている。

(7) 山笠と古い町並み

女衆が「懐かしい」と感じる町並みは、「山笠が走る古い町並み」であり、「懐かしさ」



が古い町並みと山笠の組合せで構成された心象的祭り風景から生じている。

### 3.1.3 男衆と女衆の認知構造の違い

男衆と女衆の認知構造の違いについて上位概念項目で比較すると表2に示すように、共通する項目は「楽しい」「緊張感」「懐かしい」の3項目である。男衆のみで出現する項目は「達成感」「落ち着く」「感謝」「祈る」の4項目である。また、女衆のみで出現する項目は「カッコいい」「願い祈る」「可愛い」「厳か」の4項目である。

表2 上位概念項目（山笠への気持ち）の男衆と女衆の違い 数値は指摘数

	達成感	落ち着く	感謝	祈る	楽しい	緊張感	懐かしい	カッコいい	願い祈る	可愛い	厳か
男衆	4	3	3	3	17	9	3	—	—	—	—
女衆	—	—	—	—	10	6	2	8	8	4	5

男衆と女衆の認知構造の違いについて下位概念項目で比較すると表3に示すように、共通する項目は「直会関連」「祭りの衣装」「祭りの風景」「祭りへの誇り」「櫛田神社への思い」「祭りへの期待」の6項目である。男衆のみで出現する項目は「祭りの伝承」「仲間の団結」の2項目である。また、女衆のみで出現する項目は「家族への思い」の1項目である。

表3 下位概念項目（具体的な理由）の男衆と女衆の違い 数値は指摘数

	祭りの継承	仲間との団結	祭りへの責任	直会関連	祭りの衣装	祭りの風景	祭りへの誇り	櫛田神社への	祭りへの期待	家族への思い	
										子供への	夫への
男衆	7	6	4	13	17	13	6	2	2	—	—
女衆	—	—	—	6	19	10	5	6	6	12	
										6	6

(注) この表の項目は認知構造図に示される下位概念項目で同様な内容のものをまとめた項目として採用した。詳細は3.1.1と3.1.2の認知構造の解説のなかで、そのまとめた項目をアンダーライン表記している。

上位概念項目（山笠への気持ち）と下位概念項目（具体的な理由）から男衆の意識が祭りそのものにあるのに対して、女衆の意識はそれを支え、家族を見守るところにあることがわかった。

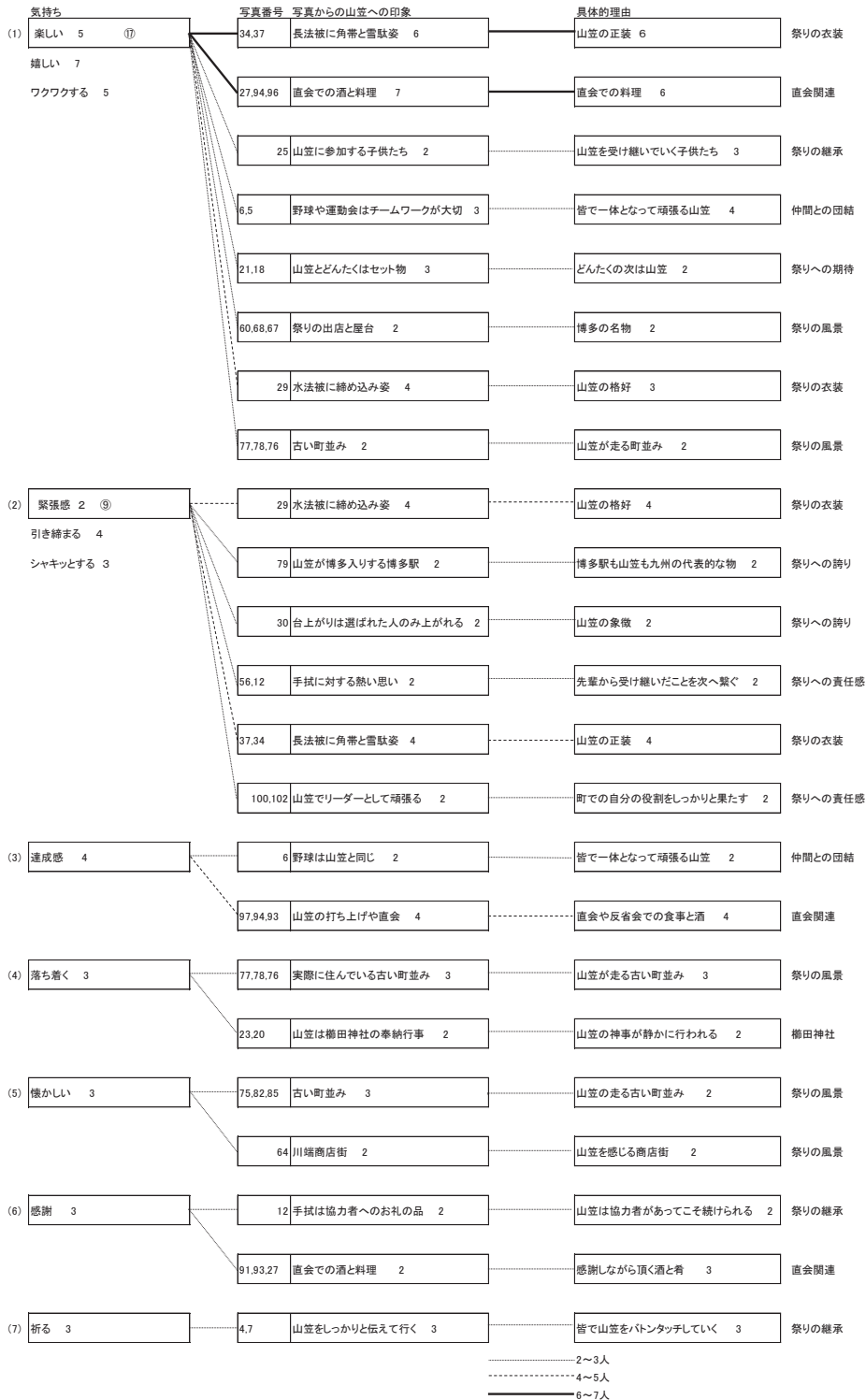


図3 男衆の認知構造図



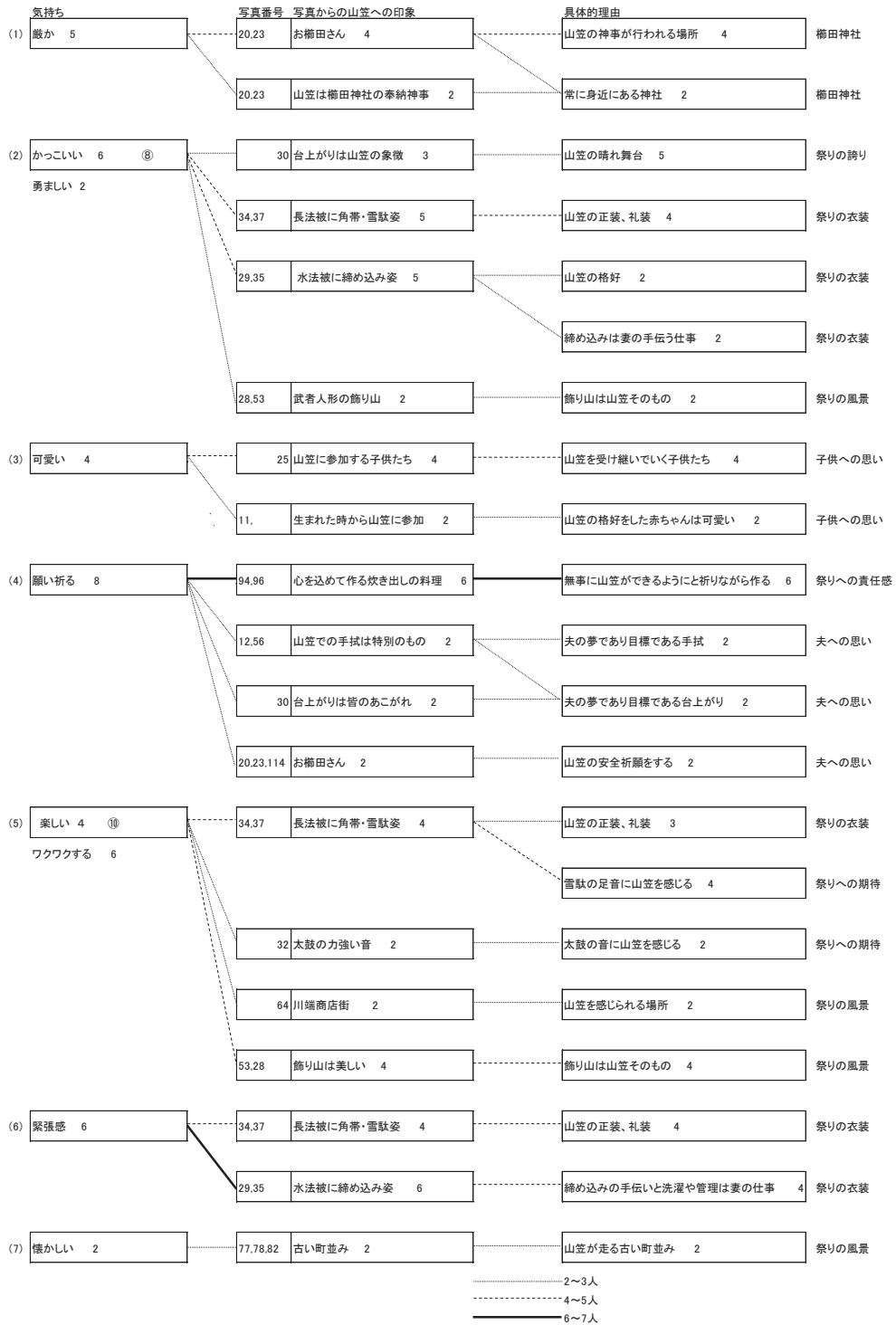


図4 女衆の認知構造図

#### 4. 調査結果の分析と考察

認知構造図に示した認知項目間の因果関係の強さをラインの太さで示し、男衆と女衆の認知構造の違いを明らかにすることができた。しかし、頻出2項目以上を対象にしたものであり、個別の認知項目で除外されるものがかなりの数になる。そこで、個人別認知構造図で得られた全ての認知項目を定義形式の定型自由文として捉え、そのテキストデータをもとにKH Coder<sup>注11)</sup>を使用し、テキストマイニングによる分析を行った。

##### 4.1 対応分析からみる被験者属性の認知の傾向

まず、形態素分析により文章を一語毎に分け、品詞情報と出現頻度を基に語の取捨選択した上で対応分析を行い、被験者の属性の違いによる山笠の認知の傾向を把握した。対応分布では、語の相関係数が高いほど近くにプロットされるので語と属性の関係を把握することができる。これによると、男衆は山笠への期待と緊張感、祭りの継承と感謝への思い及び追山コースの町並みに関わる思いが見てとれることがわかる。女衆は生活に根ざした家族が着用する山笠装束とその姿への気持ちと祭り無事を願う思いを持っていることがわかる。対応分析の結果を図5に示す。図5の点線の範囲が男衆で、破線の範囲が女衆の山笠への思いになる。

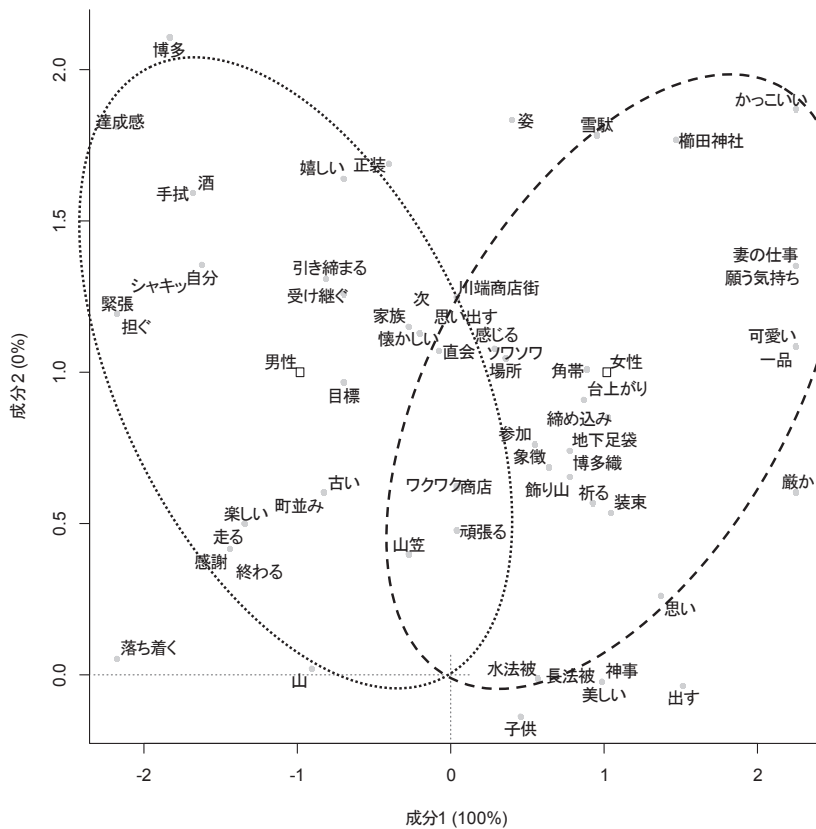


図5 対応分析の結果

#### 4.2 共起ネットワークによる山笠とトポフィリアの関係

クラスター分析 (word法jaccard係数) により、6つのクラスターに分けることができた。その結果を共起ネットワークから抽出された語のつながりと重ねてみる。

ここでは、出現回数6回以上の語を使用して同じ段落によく一緒に出現する語同士の因果関係に応じて線で結んだネットワークとして示す。その結果、6グループとグループ間の基本的な空間構成とその要素間のつながりを4つの場所と象徴的な祭り空間で確認することができた。一つは山笠の装束 (家庭)、二つ目に追い山コースの町並み (地元商店街)、三つ目が直会 (詰所)、四つ目が山笠の神事 (櫛田神社) と山笠の象徴的な祭り空間である。

トポフィリアとは、「人々と、場所あるいは環境との間の情緒的な結びつき」であり、「物質的な環境と人間との情緒的なつながりをすべて含むように広く定義できる」ものとされている (Tuan1974)。図6に山笠とそれに携わる人々のトポフィリアの関係を図解して示す。

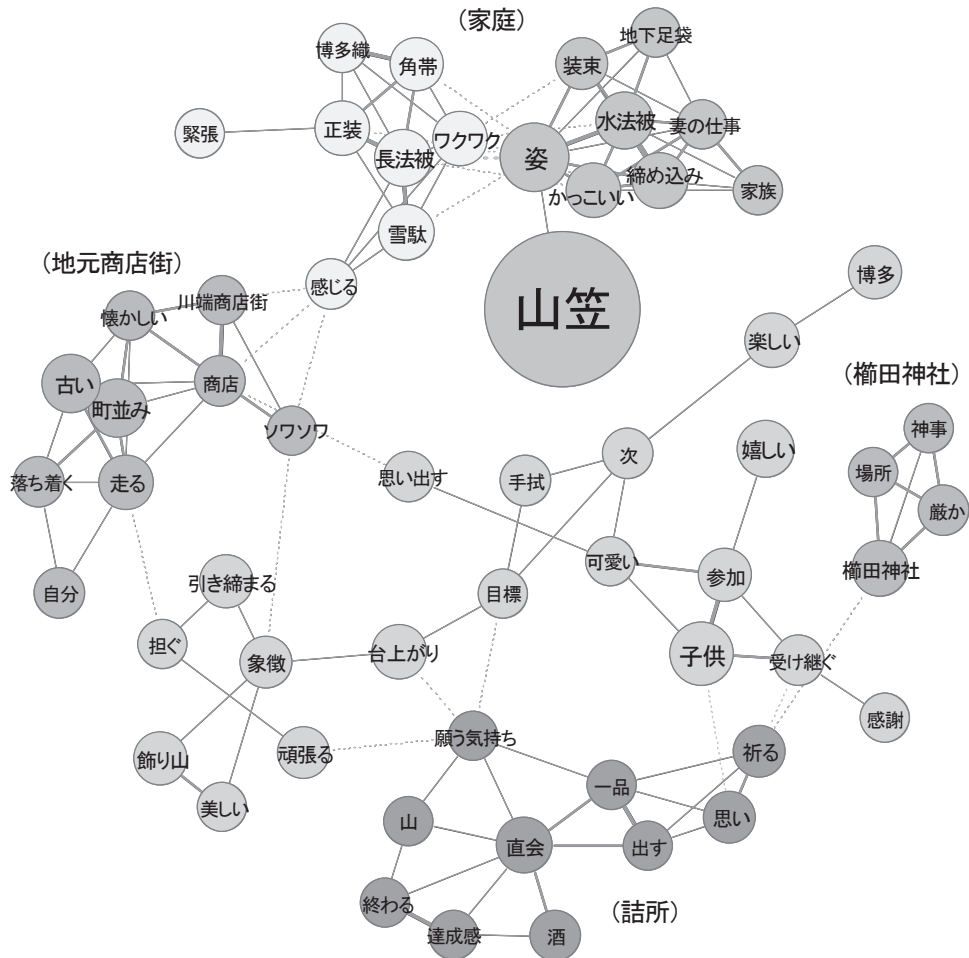


図6 山笠のトポフィリア (共起ネットワーク図)

#### 4.3 男衆と女衆の山笠への思いと祭り要素のクロス集計

次に、男衆と女衆の山笠に対する思いを5つの祭り要素（コンセプト）の関係についてクロス集計結果を述べる。各祭り要素に属する語のどれかが出現する文章はその祭り要素に言及していたと見なされる。下記に各祭り要素の内容を示し、その内容と被験者属性のクロス集計した結果を図7に示す。

5つの祭り要素（コンセプト）

\*祭りの衣装（地下足袋、水法被、締め込み、装束、長法被、正装、角帯、博多織、雪駄、洗濯、姿、かっこいい、妻の仕事、姿、勇ましい）

\*祭りの風景（古い、町並み、走る、商店、落ち着く、懐かしい、自分、担ぐ、町屋、地元、川端商店街）

\*家族への思い（子供、可愛い、こども、赤ちゃん、家族、夫、妻の仕事）

\*櫛田神社（櫛田神社、神事、祈り、厳か、奉納、祈願、神社、願う気持ち、安全、場所）

\*直会関連（直会、酒、達成感、手拭、正装、引き締まる、シャキッ、酒、日本酒、楽しい、手拭、目標、炊き出し、手伝い、協力、仲間）

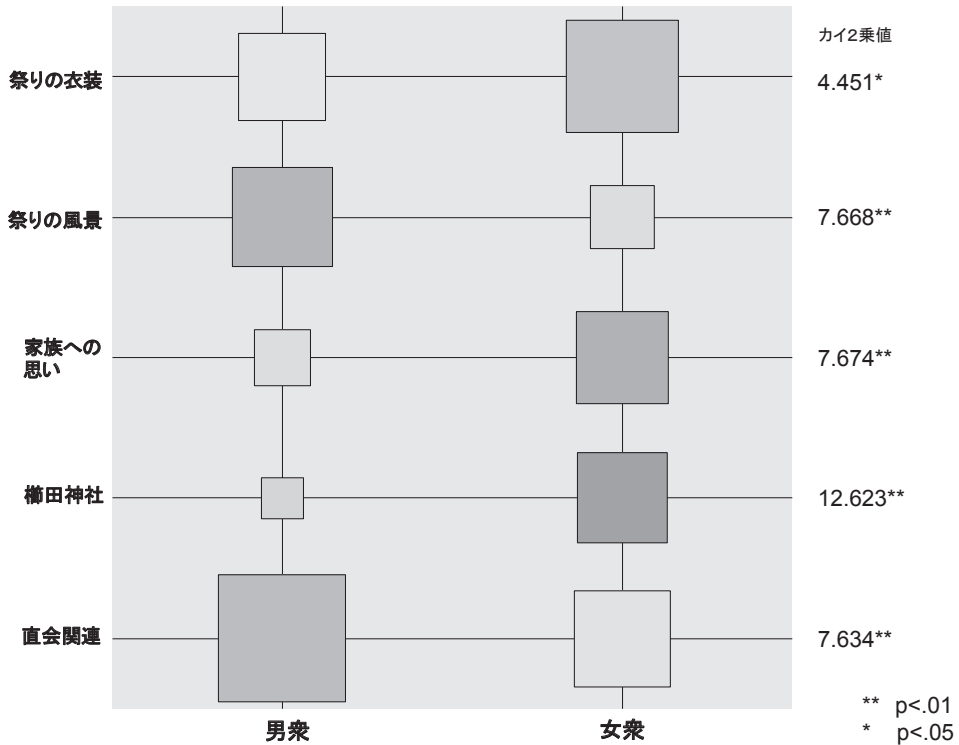


図7 被験者の属性と山笠関連認知の関係

山笠の認知構造の違いについて、男衆は追山コースになっている川端商店街の古い町並みと直会での仲間交流に関する意識が女衆と比較すると1%水準で有意である。また、女衆は家族と祭りへの思いと櫛田神社への畏敬の念については男衆と比較すると1%水準で有意である。祭り装束については5%の水準で有意である。その結果を図7に示す。このことより、山笠での男衆と女衆の認知構造の違いは男衆の意識は山笠の祭りそのものである外に向けられているのに対して、女衆は生活、家族の祭り衣装の世話と祭りの安全への思いに向けられていることがわかった。

## 5. まとめ

山笠に携わる男衆の女衆の役割の違いによる祭りに対する認知構造の違いを認知構造図の違いとして可視化することができた。その結果より、男衆の意識が祭りそのものにあるのに対して、女衆の意識はそれを支え、家族を見守るところにあることが示唆された。

また、個人別認知構造図で得られた全ての認知項目を定義形式の定型自由文として捉え、そのテキストデータをもとにテキストマイニングによる分析を行った。その分析で、認知構造図から得られたコーディング基準をもとに精度を高めた結果からも、山笠での男衆と女衆の認知構造の違いは男衆の意識は山笠の祭りそのものである外に向けられているのに対して、女衆は生活、家族の祭り衣装の世話と祭りの安全への思いに向けられていることが示唆された。

また、山笠とそれに携わる人々のトポフィリアの関係を可視化することができたことで、山笠に携わる人々の共通意識と物理的な場所を含めた因果関係を共通意識構造マップとして示すことができたことは今後の山笠の研究に貢献できるものと考えられる。

## 謝辞

この調査は博多山笠の東流の方々のご協力により達成できたものであり、本研究の趣旨を理解し快く協力していただいた皆様に心から謝意を表します。

## 注釈

### 1) 昇き山 (かきやま)

山笠台の重量は約850kg、櫛田入りの際は台上がり6人の体重が加わるので優に1tを超える。釘を一本も使わず、麻縄で頑丈に組み立てられる。昇き棒は6本で、長さ約5.45m、両外側から一番棒、二番棒、三番棒と呼ばれ昇き手の身長に応じて担えるように、棒によって地面からの高さが異なる。

外側の一番棒が高く、内側の三番棒が低い。若い昇き手の身長が伸びたのを理由に、昭和63年東流の棒の高さ(従来は1.24m)が1.5cm高くなった。国の重要無形民族文化財

指定である。

- 2) 「7つの流れ」 流という町の集合体で、一本の山笠を運営する。現在は、大黒・東・中洲・西・千代・恵比須・土居の七流によって運営されている。
- 3) 「水法被」 山笠を早く時のユニホーム。各流や各町でデザインが異なり、前裾を結ぶ標準タイプと、久留米緋の織物などによる身丈が短く胸前を小紐で結ぶタイプがある。
- 4) 「清道」 紺に白く清道の二文字を浮き出させた、縦4.5m、横90cmの長旗。櫛田神社の境内、東長寺、承天寺の門前の3ヶ所に立てる。山笠はこの3つの清道を巡って決勝点（回り止め）を目指す。
- 5) 「長法被」 当番法被とも呼ぶ。例年6月1日から着用が許される山笠の儀礼服である。各町名をデザイン化した緋。
- 6) 「直会」 山笠期間中の行事ごとに行われる食事会。男衆皆で車座になり、ねぎらいと反省を行う。その準備や料理を用意するのは女衆（ごりょんさん）たちの役割である。
- 7) 「東流」 東流（ひがしながれ）は、博多祇園山笠や博多松囃子（博多どんたく）の運営における構成の単位である流の一つである。福岡市博多区地域の東大通りの東側、南北に伸びる旧東町沿いを区域とし、御供所町・上呉服町・中呉服町・下呉服町・博多駅前一丁目から成る。
- 8) 参考文献5) の図を転載
- 9) 参考文献7) の図を翻訳して記載
- 10) コラージュに使用する写真は、被験者自ら準備する方法と事前に実験者側で準備する方法がある。前者は後者と比較して被験者に労力と時間を要する。本研究では後者の方法を採用している。このコラージュで使用する写真は心象イメージの「喩え」であり、喩えに使用された写真を手掛かりに、それに関係する言語を引き出すきっかけを作る道具である。従って、ここでは、山笠を表現するに足りると思われる「自然」「動物」「家族」「車」「建物」「神社」「スポーツ」「食物」「デザイン柄」「祭り風景」「浮世絵」「町並み」「季節の飾り物」の写真300枚からコラージュの試行を重ね130枚を選定した。
- 11) KH Coderは樋口耕一氏が開発したテキストマイニングの分析用フリー・ソフトウェア。なお、統計解析ソフトは、このソフトに連動するRobert Gentleman氏により開発されたフリーソフト「R」を使用した。

#### 参考文献

- 1) 宇野功一、儀礼，歴史，起源伝承 博多祇園山笠にかんする一考察、国立歴史民俗博物館研究報告、136(2007)40-41
- 2) 日比野愛子、杉万俊夫、祭りを支える人々：博多祇園山笠の事例、ジャーナル「集団力学」、28(0)(2011)42-65



- 3) 田村華、上田祥史、菊池成明、博多祇園山笠における町組織の持続と変質－詰所と女性の役割の分析から－、日本建築学会学術講演梗概集、(2004)399-400
- 4) 楠本大輔、菊池成明、柴田建、博多祇園山笠における直会の風景－早き手・ごりょんさん・こどもの視点から－、日本建築学会研究報告 九州支部、48 (2009) 233-236
- 5) 讚井純一郎、日本建築学会編、環境心理調査法入門、技法堂出版(2000)13
- 6) 森永智年、大井尚行、高橋浩伸、イメージコラージュを用いた住環境評価手法の検討について、日本建築学会研究報告 九州支部、50(2)(2011) 13-16
- 7) Pavio, A., A Dual Coding Approach, new edition, Oxford University Press (1990)
- 8) 樋口耕一、社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版(2014)
- 9) Petri, H, G., Ortony, A., Metaphor and Thought, 2nd edition, Cambridge University Press (1993)
- 10) 森永智年、熟練設計者の専門性における認知構造の可視化に関する研究、職業能力開発研究誌、30(1)(2014) 25-34
- 11) Yi-Fu Tuan., TOPOPHILIA: A study of Environmental Perception, Attitudes and Values, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey (1974)、イーフトゥアン、小野有五・阿部一訳、トポフィリアー人間と環境、せりか書房 (1992)

## **A Study on Difference of Cognitive Structure of Male Members and Female Members about “Hakata Gion Yamakasa”**

Chitoshi MORINAGA\*<sup>1</sup>, Mariko DOI\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>Department of Human Life Studies, Faculty of Home Economics,  
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, kitakyushu, Fukuoka

\*<sup>2</sup>406-24-8-3 Orio, Yahatanishi-ku, kitakyushu, Fukuoka

### **Abstract**

“Hakata Gion Yamakasa” is one of the three major festivals in Japan. A group of male members of the community called “Hakatabu” supports Yamakasa, while it can be said that support by female members behind the scenes has been essential for taking over this tradition in this district for generations. There has been no research about the awareness of the males who carry Kakiyama Floats and family members who support them about “Hakata Gion Yamakasa”.

In this study, the difference in perceptions about “Hakata Gion Yamakasa” between males and females who are involved in this festival is revealed by using an analytical method of an image collage technique to delve deeper into the subconscious and visualizing it as the difference in cognitive structure.

As a result, for the conscious of male members that is in the festival itself, conscious of female members was found to be in that watch support it.

**Key words** : hakata gion yamakasa, cognitive structure, image collage, dual coding theory, text mining, topophilia